

保育内容「表現」の授業におけるサウンドマップづくりの効果と課題

— 自由記述の分析から —

長嶺 章子

Effects and Problems of Making the Sound Map in the Class of Daycare "Expression" : From the Analysis of Free Description

NAGAMINE Akiko

本研究の目的は、保育内容「表現」の授業におけるサウンドマップづくりの実践が学生にもたらした効果について明らかにすることである。保育内容「表現」において、保育者には、乳幼児期の多様な表現を受容し共感するまなざしが必要であるとされるが、こうした保育者になるためには、まず保育者自身に豊かな感性が求められる。そこでこの授業では、学生が自身の感性について考え、保育実践への応用について学ぶための演習として「サウンドマップづくり」を実践した。実践後の自由記述を意味内容ごとに分類・考察した結果、学生は自身の先入観と無自覚に気づいたことが明らかとなった。これを機に「感性」「多様な表現」「保育実践」への関心が高まり、自身の感性について省察し、この体験を保育実践に応用する方法について考えようとする記述があった。こうした結果から、この実践は保育内容「表現」についてアクティブな思考を促す効果があることが示された。

キーワード：保育者養成、保育内容、表現、感性、サウンドマップ

1. 問題と目的

1-1 保育者の感性を高めるために

本研究の目的は、保育内容演習（表現）の授業におけるサウンドマップづくりの実践が、感性や表現について学生にどのような気づきや学びをもたらしたのかについて明らかにすることである。

幼稚園教育要領および保育所保育指針のねらい及び内容においては、感性と表現に関する領域を「表現」として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを目標としている。この「感性を養う」という目標は、幼稚園教育要領にはじまり、小学校・中学校・高等学校まで一貫して芸術系教科の学習指導要領において目標とされている（高等学校においては感性を「高める」）。また、高等学校の芸術科の目標においては「生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てる（傍点は筆者）」

との表現がある（文部科学省，2009，p.8）。こうしたことから、芸術教育は幼児・児童・生徒の感性を養い高めるための様々な実践を通して、最終的には「生涯にわたり」芸術を愛好する心情を養うことを大きな目標の一つとして掲げていることがわかる。このように芸術教育全体を長期的な視点で俯瞰したとき、幼児期の領域「表現」に関する活動はその最初期の段階に当たることから、続く小学校以降に接続され展開していくことを想定した計画をたてることが大切であると考えられる。幼児期の領域「表現」に関する活動は、つまりこれから始まる長い人生を感性豊かに生きていくための基礎づくりの活動であり、こどもの人生を豊かなものにするためにたいへん重要な役割を担っているといえる。

保育者が、幼児教育現場において豊かな表現活動を展開するためには、まず保育者自身が感性豊かな人間であることが求められるのは当然のことである

う。このことは、幼稚園教育要領解説・保育所保育指針解説書においても繰り返し述べられている。

こうしたことから、本学における保育内容演習（表現）の授業において、筆者は保育者自身が感性豊かな人間であることの重要性について、特に繰り返し述べている。このことについて学生に深く理解してもらうために、2年次の前期15回という限られた時間の中で、どのような授業を計画していくのかについては、常により良い方法を検討していく必要がある。そこで本研究では、様々な試みのひとつとして実践した「サウンドマップづくり」の効果と課題について検討し、学生の思考の変化について考察することとした。

1-2 サウンドマップづくり

幼児は、生活や遊びの中で体験するありとあらゆる出来事を五感で感じ、さまざまに心を動かされることにより、イメージを豊かにしていく。そして、思いをさまざまな方法で表現する。幼児の表現に決まった型はなく、身体・言語・音楽的・造形的というようなさまざまな領域の表現が未分化な方法でなされることが多い（文部科学省、2008、p.163）。保育者には、幼児のこのような自由な表現を敏感に感じとり、表現したい思いを受けとめ、のびのびと表現できる環境設定を行うことが求められる。そこで、保育者自身が感覚を研ぎ澄まし、敏感に気づいたり感じたりする体験が必要であると考え、「音」をキーワードに実践演習を行った。

音に関する活動について多くの成人は、これまでに受けてきた教育の影響から、音楽活動すなわち器楽演奏・歌唱といった楽曲演奏について思い浮かべるだろう。本研究ではこのことに着目した。本研究におけるサウンドマップづくりは、細田（2006）を参考にしたが、その原点はR.マリー・シェーファーが提唱したサウンドスケープ（soundscape：音の風景）である。サウンドスケープとはサウンド（sound：音）とスケープ（scape：風景）を組み合わせた造語であり、音楽の演奏だけでなく、自然の音、都市の騒音、人工的な電子音まで、世の中に存在するあらゆる音をひとつの風景として捉え、人々と音がどのような関係であるかを探る概念である。この概念を基に、普段は聞き逃しているがそこに存在する音

に耳を傾けようとする活動が本研究における演習である。新たな発見をしたときの感覚—驚いたり感動したり心が動く様子—について省察することにより、保育者としての自身の感覚をより鋭敏かつ繊細に研ぎ澄ますことが、幼児の表現について理解し、指導するうえで不可欠であるということを学生に認識させるねらいで、この演習を計画した。

2. 対象と方法

2-1 研究の対象と方法

(1) 調査対象者

U短期大学2年生109名のうち、対象となる授業に出席し自由記述を提出した106名。

(2) 調査方法

対象授業（全3回）の終了前に10分間程度の自由記述の時間を設け、提出してもらう。自由記述のテーマは、授業ごとに提示する。

(3) 調査内容

各回の自由記述の意味内容から、学生の思考の変化について考察する。

(4) 倫理的配慮

調査にあたっては目的を説明し、調査結果は論文執筆においてデータとして使用するが、個人が特定されることはないことを口頭で説明した。また、具体的な引用例を示して使用方法について説明した。さらに、調査協力は任意であり、データとしての使用を拒否する権利があることを説明した。当日の配布物に拒否するためのチェック欄を設けて意思表示できるようにしたうえで、当日の出席者全員の同意を得て実施した。

2-2 考察の方法

各授業終了時の自由記述を意味内容ごとに分類し、対象者の思考の流れを図式化し、考察する。

2-3 授業の詳細

2-3-1 授業形態

クラスはA組54名、B組55名の2クラスに分かれており、それぞれが1回90分間の授業である。主活動は各クラスをさらに6-7名の班に分けて活動した。

2-3-2 授業の概要

本研究対象の授業は、導入が1回、主活動が1回、まとめの活動が1回の合計3回の授業で構成し、2クラスについて同様の展開で授業を実施した。

表1 授業の概要

第1回	導入	音・聴覚への関心を高める。
第2回	主活動	音を収集する。聴覚で感じたことを視覚の作品で表現する活動を通して、豊かな想像力・表現力を養う。
第3回	まとめ	他者の表現に触れ、多様な表現を受容し共感する感性を養う。

2-3-3 授業の詳細

各授業の詳細は以下のとおりである。

第1回：導入

[本時のねらい]

音と聴覚に意識を集中させる。音を素材と捉える視点をもつ。

細田（2006）を参考に、以下の活動を行った。

(1) 「トライアングル消えたかな？」

筆者がトライアングルを強い音で1度鳴らす。学生は音が鳴っている間、聴こえる音をイメージした自由な身体表現を継続する。音が聴こえなくなったと判断したところで静止する。

(2) 「トライアングルの場所当てクイズ」

学生は床に座り目を閉じる。筆者は、トライアングルを強い音で1度鳴らす。音がなっている間、筆者はトライアングルをもって室内をランダムに歩き回る。学生は目を閉じたまま音の聞こえる方向を聴覚のみで追う。最後に音が消えたと判断したところで、消えた場所の方向を指で指し示す。目を開けて、実際の場所との当たり・ハズレを確かめて楽しむ。

第2回：主活動

[本時のねらい]

- ①生活の中で普段は聞き逃している音に耳を傾ける活動を通して、「音」に関する演奏以外の活動を体験する。
- ②聴覚で感じとったことを視覚で表現する活動を通して、分野横断的（音楽表現×造形表現）な表現活動を体験するとともに、豊かな想像力を養う。

(1) 音さがし

サウンドマップづくりの準備として、学内の任意の場所へ行き、音を収集してくる。6～7名のグループで行う。場所は事前に各班で決定し、申告してから行う。収集（記録）の方法も各班ごとに考える。

(2) サウンドマップづくり

収集した音を、絵画で表現する。どの場所に、どのような音があったのかを模造紙（通常の半分の大きさ）に、自由に表現する。表現に使用する画材や表現技法・構図などはすべて「自由な発想で」とだけ告げ、対象者の発想に制限を加えずに、多様な表現がなされることに配慮した。

第3回：まとめ

[本時のねらい]

- ①他者の表現に触れ、自分では思いつかない多様な表現があることを知る。
- ②他者の多様な表現を受け止め、共感する体験を通して、保育者として子どもの多様な表現を受容し共感する視点を持つ大切さに気付く。
- ③全3回の活動を振り返り、自身の感性や表現について、また保育・幼児教育現場での「表現」の指導法について考える。

● サウンドマップ展覧会

まとめの活動として、他者の作品を鑑賞する活動を行った。

- ①各班の作品を廊下に掲示する。
- ②各班から1～2名、解説者として作品脇に立ち、作品の解説をしたり鑑賞者と質疑応答をする。
- ③鑑賞者はすべての作品を順に鑑賞する。途中で解説者を交代し、全員が鑑賞できるようにする。
- ④もっとも印象に残った表現作品についての批評と、自分自身や所属する班の表現についての振り返りを行い、レポートを提出する。

3. 研究の過程と結果

3-1 第1回（導入）：聴覚に意識を集中させる活動

3-1-1 「トライアングル消えたかな？」

この活動では、対象者はトライアングルの音が

鳴っている間、自由な身体表現を継続し、音が聴こえなくなったら静止することになっている。学生は最初、くすくす笑ったり話したりして、全体にざわついてた。徐々に音が小さくなってきたところでもう聴こえなくなると判断して静止したり、周囲の様子をうかがって静止する者もいた。

筆者が「本当に？本当にもう音が消えた？」と問いかけると、まだ僅かに鳴っている音に気づく学生がいた。それは必然的に楽器のすぐ近くにいる学生となる。「あ！まだ鳴っているよ！」と言って楽器に耳を近づけると、ほかの学生が一斉に関心を持って静かにこの学生を見守り始めた。「まだまだ！……あ、消えた！」というような発言から、教室にいるすべての学生が、自身の集中力が散漫であったことや、音が消えたと感じたのは思い込みで、実際にはまだ音が鳴っていたことに気づいた。そしてこの音に対し改めて関心を持つようになった。そこでもう一度繰り返すと、今度はそれぞれの学生が自身の聴覚と鳴っている音に意識を集中する姿が見られた。ひそひそと話したり、笑ったりしては聴こえないほどの小さな音がそこに存在するのだということに気づき、余計な音を発しないように気を付けながら意識を集中する姿が見られた。

さらに、楽器から遠い位置にいる学生ほど静止の（音が消えたと判断する）タイミングが早くなる様子が見られたため、筆者がそのことへの気づきを促す言葉がけをしたことにより、学生は音が届く距離と時間の関係にも気づいた。また、最初の実践では音に意識を集中しきれておらず「音はもう鳴っていない」と判断したのは自身の先入観であったことを認識した。さらに聴覚に意識を集中すれば、実際にはまだ鳴っている音があるのだということにも気づいた。自由記述では、半数程度の学生がこのことについて驚きと感動があったことを記し、自身の感受性や集中力を高めて周囲の事象を感じ取ることに関心を持った。

3-1-2 「トライアングルの場所当てクイズ」

この活動は、前項の活動に続けて行ったため、学生の関心や意欲が高まっており、初めから静かに集中して臨む姿が見られた。カーペットが敷かれた床に座り、目を閉じて、聴覚のみで音の鳴る方向を捉

える活動である。最終的には音が消滅した場所を指さして目を開け、実際の位置との差異を確かめたり、周囲の仲間との違いを知って楽しんだりする。実際には約50名の学生は様々な方向を指さしていた。自由記述では、聴覚のみで音の位置を認識することの難しさについて述べたり、音が壁面に反射して聴こえてくる方向が変わったのではという分析的な記述も見られた。また、保育現場で実践したいといった、現場への応用についての記述もあった。

3-1-3 導入の活動からの学び・気づき

導入の活動後の自由記述では、多くの学生が自身の先入観に対する気づきや、「音」の性質に関する驚きと感動があったことを記した。また、自身の感受性や集中力を高めて周囲の事象を感じ取ることに関心を持ったことが読みとれた。さらに、演奏活動以外での「音」に関する活動について述べる者もあった。表2は具体的な記述例である。

この活動は、学生自身の感性を高めるためにはまず自分の感受性がどの程度のものか、あるいは周囲の事象について十分に知覚しているかどうかについて認識することが必要であると考え、導入として取り入れた。その結果、これまで自分が気づいていな

表2 導入の活動から学んだこと・気づいたこと

記述例
(トライアングルの)音が消えるまであんなに(時間が)かかるなんて初めて知った!!
トライアングルをよく聞いてみると思ったより長くなっていることが分かった。居る場所によって聞こえている時間が変わっておもしろかった。
こんなに音に集中する時間は、普段生活している上ではなかなかないし、大切だと感じた。
周りの音に耳を傾けると普段からいろいろな音が身近にあるということに気づく。
意識してきかないときけないこともある。
自分が無意識に聞いている音も考えてみたら音がない世界ってないなあと思った。
音楽は歌うかピアノばかりで嫌なイメージが大きかったけれど、今回も次回も全然違うので楽しみです。
音楽が苦手でも楽しく参加できると思いました。
音楽としてだけでなく音その物を使って遊びたいと思った。

かった音や事象がたくさん存在するのだということに多くの学生が気づいた。こうした経験により、次週の「音さがし」と「サウンドマップづくり」の活動への関心が高まり、アクティブな活動へ繋がったといえる。

3-2 第2回（主活動）：聴覚で感じたことを視覚で表現する活動

3-2-1 音さがし

音をさがしに行く場所は班ごとに自由に決めることとした。申告させると次のようになった（表3）。

表3 音さがしの場所

A組	1班	L棟わたり廊下の池
	2班	学生ホール
	3班	kusu-kusu（学食）
	4班	センターモール
	5班	kusu-kusu（学食）
	6班	L棟のエレベータ
	7班	A棟の階段
	8班	L, A, B各棟のエレベータ
B組	1班	屋外（共生の森）
	2班	屋外（グラウンド）
	3班	屋外（共生の森）
	4班	L棟トイレ
	5班	図書館
	6班	学生ホール
	7班	図書館
	8班	屋外（体育館前）

話し合いの過程で各班が互いに影響を与えるためか、クラスごとに同じ場所が見られる。筆者にとって図書館は、静かで音が少ない印象があったのだが、複数の班がこの場所を選んだことは興味深い。また、エリアではなくエレベータやトイレというように焦点を絞った班もあり、これもまた意外性が感じられた。「自由」としたからこそ見られた多様な発想であり興味深い事例であった。

筆者から「見つけた音をどのように持ち帰る（記録する）のか、考えた方がいいのでは？」と提案した結果、スマートホンに録音する者や、擬音語を

使ってメモを取る者がいたが、多くは班のメンバーと話し合いながら、記憶するのみであった。

この回の自由記述には、「思ったより静かだった」というように、推測したり想像したりしてから行動したことを示す記述があり、この活動により自己の先入観を認知し感受性をより豊かにしたいという意欲につながったことが読みとれた。また、「ふだん聞こえていない音がたくさんあることに気付いた」というように、これまで気づいていなかったが存在していたものを発見し、驚きや新鮮な気持ちを味わった様子を読みとることができた。

3-2-2 サウンドマップづくり

3-2-2-1 各班が選んだ画材

いよいよ主活動である音を絵画で表現する「サウンドマップづくり」である。学生には前週に「使用する画材は自由。学校の備品として水彩絵の具・色鉛筆・クレヨン・油性ペンは用意がある。それ以外の画材を使う場合は各班で用意すること」と指示した。筆者にも固定観念が少なからずあると考え、筆者の思いもよらない独創的な発想を引き出したいねらいで、あえて画材を指定せず「自由」という言葉を使用した。その結果、一つの班を除いて、全ての班が色鉛筆か水性・油性ペンを使用して制作した。一つの班は、折り紙で絵画を制作する（ちぎったり折ったり丸めたりして貼る）ことで独創的な表現を目指した。106名全16班のうち、これら以外の画材を用いた班はなかった。

3-2-2-2 各班の表現方法

「サウンドマップづくり」の説明の際、「耳で聴いた音を絵で表現する」としたが、これが「難しい、よく意味が分からない」との反応が少なからずあった。説明のために具体例を挙げると自由な発想に影響を与えてしまうと考え、なるべく例を挙げたくなかったが、「何をしたらよいかまったくわからない」という反応もあったため、例えば漫画や挿絵などで、風が吹く音や楽器演奏の音など実際には視覚で認知できない物事を絵で表現したり、爆発音を「ドカーン！」などの擬音語と共に絵で表したりしていることを話し、想像を支援した。すると、よく理解できたようではあったが、作品はやはりその影響を

受けたものが多くなった印象である。

図1は、図書館1階で聴こえた音を表している。パソコンのキーボードの機会的な音を角ばった形で青い色で表現している。そのほか、出入り口から入る風をピンクの波線で表現したり、学生の話し声は黄色で、人の声が重なり合う様子を表現したりしている。

図2は、屋外で聴こえた音を表している。やはり



図1 配色・形・画材・技法でイメージを表現した作品①



図2 配色・形・画材・技法でイメージを表現した作品②



図3 地図の表現に比重が置かれた作品

聴こえた音を色・形・大きさで表し、また色鉛筆と水性ペンを使い分けることで、画材の質感についても意図をもって表現することに挑戦している。

図3は、サウンドマップという言葉から「地図(=俯瞰図)」を作成することに重きを置いた作品である。物や人の配置を忠実に描写し、音についてはすべて擬音語で表している。

図4は、図書館で聴こえた音を表しているが、実物の描写をせず、感じたことから新たな絵画作品を制作した例である。たとえば階段の足音は、階段そのものを描かずにそれとわかるような表現がなされ、図書館は全体的に明るく楽しい印象を受ける場所であることを表現した作品になっている。

図5は、トイレで聴こえた音を表している。俯瞰図も描きながら各箇所で聴こえた音を自由な配置で描いたところに、独創性がある。配色や形での表現と擬音語を組み合わせる表現している。

図6は、独創的な表現をねらい、折り紙を使用した例である。色・形・折り皺・切り方(ハサミで切

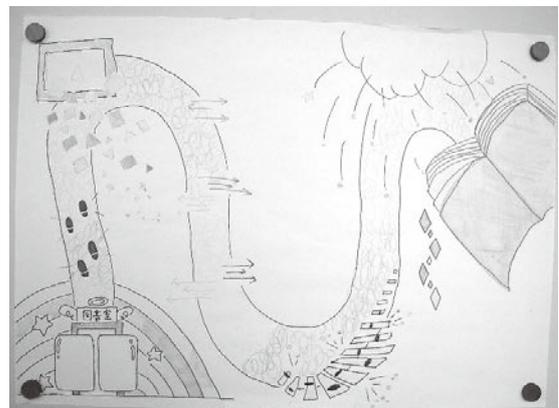


図4 聴こえた音や感じた印象から新たな作品を生み出した事例

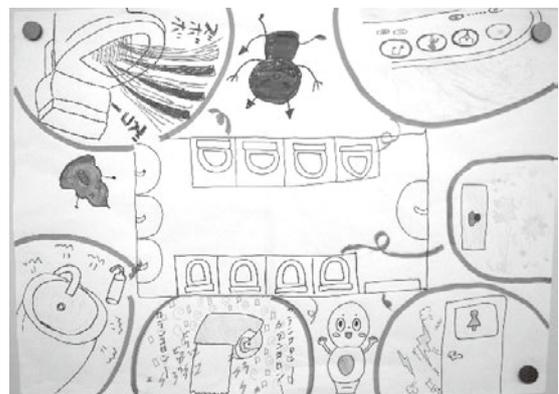


図5 俯瞰図と自由な配置を組み合わせた表現



図6 折り紙を使った表現

る・手でちぎる) などにより、感じたことを表現することに挑戦している。

以上が代表的な表現であるが、表現方法の特徴で分類すると、①配色・形・画材・技法でイメージを表現する作品②地図の表現に比重が置かれている作品③感じたことから新たな表現を生み出す作品④俯瞰図と自由な配置を組み合わせた作品⑤折り紙を使った作品、以上の5つの傾向に分類できた。全16作品がこれらのいずれかの傾向にあてはまるものであった。筆者は、1年次の授業科目「保育の表現技術I (造形表現)」で学習したであろう絵画の技法を、応用的に取り入れるグループがあることを期待したが、今回の実践ではそのような表現は出てこなかった。

3-2-2-3 主活動後の自由記述

主活動の終了時に自由記述を課した。主活動は、音さがしをしたあとにサウンドマップをつくるというものであるが、記述によると、サウンドマップづくりについては「難しかった」「うまくできた」「おもしろかった」などの感想のみであったのに対し、音さがしの活動については、初めての感覚に対する驚き、新鮮さ、そこから探求心が芽生える過程が読みとれた (表4)。

3-3 第3回 (まとめ) : 他者の表現に触れ、多様な表現を受容し共感する活動

この活動のまとめとして「サウンドマップ展覧会」を以下のながれで実施した。

- ①作品を廊下に展示する。
- ②各班の代表者2名が解説者として作品脇に立

表4 「音さがし」から学んだこと・気づいたこと

記述例
・普段気づかないような音も聞こえた。
・思っていたよりもたくさんの音をさがすことができ、こんなに音であふれているんだと思いました。
・他の場所にも耳をすましてみたいと思いました。
・いつもイヤホンをして音楽を聞きながら歩いたりして、けどイヤホンせずに自然の音に耳を澄ましてよかったと思いました。
・自分の家の近くにはどんな音があるのか、知りたくなりました。

つ。

- ③残りの学生は鑑賞者として順に鑑賞する。
- ④解説者は、巡回する鑑賞者に対し、随時解説や質疑応答をおこなう。
- ⑤途中で解説者を交替し、全員が全作品を鑑賞する。
- ⑥印象に残った作品や解説について、また、自身や班の表現について振り返り、レポートを提出する。

解説者となった学生は、自分たちの発想のアピールポイントを熱心に説明し、鑑賞者となった学生は多様な発想や表現について深く関心を寄せ、説明に聞き入ったり質問をしたりして鑑賞した。

この授業の終了時のレポートは、本時のねらいを達成するための支援として以下の項目を用意し記述させた。

● 自由記述の項目

- ①最も印象的だった作品とその理由。
- ②他班の作品を鑑賞して考えたこと、自分の発想と比較してどのような違いを感じたか等 (「上手」などの技術のことではなく発想や感性の面について書く)。
- ③保育者になったとき、今回の活動をどのように生かすことができそうか。

本時の活動とレポート記述により、各自が自分には無い発想に触れて感動したり、受容・共感したり、自分の表現や班の活動について振り返る契機となったといえる (表5)。

表5 多様な表現に触れた後の記述

記述例
<ul style="list-style-type: none"> ・その場あった『物』を描くのではなく、自分たちの想像した物（動物など）が描いてあったりして「そういう表現もあるのか」と思った。 ・人それぞれで音の感じ方、表現の仕方が全然違うことがよくわかりました。 ・自分たちは聞こえてきた音をそのまま書いて表現しました。他のグループは雰囲気なども取り入れて音マップをつくっていました。 ・様々な表現方法があるとわかった。見ている景色を音に視点を向けてかくと違ったマップ図ができるんだとわかりました。 ・大きさがったり、色など、音を実際に絵にして描くことで、見てみて本当にその音のイメージに合っていました。 ・どの班の作品も自分たちで聞いた音を自分たちの発想や感性で音を表現していました。（中略）このような活動をして、自分の想像力はまだまだだと感じました。 ・他の班は、音だけではなく光のイメージも絵描いていたり（原文ママ）、折り紙を使い音を作っていました。その発想が素晴らしいと思いました。 ・私は、やはり固定された考え方をしてしまって、あまり表現をすることが上手くできませんが、（中略）聞こえる音だけではなく音の大きさなども違うので、もっといろんな音を聞こうと思いました。 ・「共感のまなざし」は、今から意識して持とうと思いました。子どものキラキラした気持ちに気づいて手をさしだせる保育者になりたいです。 ・声かけを、ワンパターンではなく、その子の感性を知ることを最初にしてからやろうと思う。 ・外や他の教室へ周りながら（原文ママ）どんな音がするのかさがし、その音に似た音（物や楽器）を作ったりしてみんなで鳴らしてみたい。 ・音や場所の表現一つでも、様々な方法、描き方を出来るよう環境をつくらうと思った。

4. 考察

まず、本研究における一連の自由記述を内容別に分類する。つぎに、この分類から対象者の思考の流れを見出して図式化し考察することにより、本研究における実践の効果と課題を明らかにする。

4-1 自由記述の内容による分類

各回の自由記述を、その内容と授業の過程ごとに分類した。本稿では分類の具体例として表2,4,5を実際に分類し表6に表した。この分類から、本研究に

より学生は何を学び、どのような思考の変化が起きたのかについて考察する。

4-1-1 導入の活動から—先入観の認知と関心・意欲の高まり—

導入の活動後の記述は、①聴覚に関する先入観の認知②音楽に対する先入観の認知③活動への関心・意欲の高まり④感想に分類することができた。なお、④感想は、「楽しかった」「難しかった」等の感想のみの記述で、①～③のいずれにも該当しないものである。この分類から、導入の活動により自己の先入観を認知し「音を素材として捉える視点」が芽生え、聴覚にさらに意識を集中して音を聞く活動をしたいという関心・意欲が高まったことが読みとれた。

4-1-2 主活動から—新たな発見と表現を探索し主体的に活動する—

主活動の終了後の記述は、⑤初めて味わう感覚⑥探求心の高まり⑦感想に分類することができた。⑦感想については前項と同様である。この分類から、「音さがし」の実践により、導入で気づきを得た「先入観」を意識し、さっそく自己の先入観を排して改めて「聴く」活動をすることへの意欲が高まっていたことが読みとれた。また「サウンドマップづくり」の実践により、これまでの活動で得た気づきや、興味・関心・表現欲求の高まりを、実際の表現活動（サウンドマップづくり）により実現できたことで欲求が満たされたと共に、自身の感受性・感性・表現力についての振り返りを促されたようである。導入で関心・意欲が高まり、表現したい欲求が生まれ、実際に自由に創作活動をする環境を与えられたことで、対象者自身が主体的かつ意欲的になったことを自分自身で実感したと考えられる。

4-1-3 まとめの活動から—自身の体験を保育に生かそうとする思考—

まとめの活動終了後の記述は、⑧他者の表現の受容⑨多様な表現への共感⑩自己の感性を高めることへの意欲⑪幼児の指導法への応用に分類した。

本時の取り組みである「サウンドマップ展覧会」は、学生が自らの体験を振り返り、気持ちや考えの変化を見つめ確かめる活動となった。こどもにもこ

のように環境設定をして、ぜひ体験させてあげたい
 というような、保育実践への応用へと向かう思考の
 過程が読みとれた。

4-2 対象者の思考の展開—関心・意欲の芽生えから 拡散的な思考へ—

以上の考察を整理し、対象者の思考の流れを図式
 化した(図7)。

まず、一連の実践を行う前の段階を第0段階とし
 て「先入観がある状態」とした。ここから、導入の

表6 自由記述の分類

過程	内容による分類	記述例
導入	①聴覚に関する先入観の認知	・周りの音に耳を傾けると普段からいろいろな音が身近にあるということに気づく。 ・こんなに音に集中する時間は、普段生活している上ではなかなかないし、大切だと感じた。 ・意識してきかないときけないこともある。 ・自分が無意識に聞いている音も考えてみたら音がない世界ってないなあと思った。
	②音・音楽に対する先入観の認知	・(トライアングルの)音が消えるまであんなに(時間が)かかるなんて初めて知った!! ・トライアングルをよく聞いてみると思ったより長くなっていることが分かった。居る場所によって聞こえている時間が変わっておもしろかった。
	③活動への関心・意欲の高まり	・音楽は歌うかピアノばかりで嫌なイメージが大きかったけれど、今回も次回も全然違うので楽しみです。 ・音楽が苦手でも楽しく参加できると思いました。 ・音楽としてだけでなく音その物を使って遊びたいと思った。
	④感想	楽しかった・難しかった等
主活動	⑤初めて味わう感覚	・普段気づかないような音も聞こえた。 ・思っていたよりもたくさんの音をさがすことができ、こんなに音であふれているんだと思いました。
	⑥探求心の高まり	・他の場所にも耳をすましてみたいと思いました。 ・いつもイヤホンをして音楽を聞きながら歩いたりしてるけどイヤホンせずに自然の音に耳を澄ましてよかったです。 ・自分の家の近くにはどんな音があるのか、知りたくなりました。
	⑦感想	楽しかった・難しかった等
まとめ	⑧他者の表現の受容	・その場にあった『物』を描くのではなく、自分たちの想像した物(動物など)が描いてあったりして「そういう表現もあるのか」と思った。 ・人それぞれで音の感じ方、表現の仕方が全然違うことがよくわかりました。 ・自分たちは聞こえてきた音をそのまま書いて表現しました。他のグループは雰囲気なども取り入れて音マップをつくっていました。 ・様々な表現方法があるとわかった。見ている景色を音に視点を向けてかくと違ったマップ図ができるんだとわかりました。
	⑨多様な表現への共感	・大きさがったり、色など、音を実際に絵にして描くことで、見てみて本当にその音のイメージに合っていました。 ・どの班の作品も自分たちで聞いた音を自分たちの発想や感性で音を表現していました。(中略)このような活動をして、自分の想像力はまだまだだなと感じました。 ・他の班は、音だけではなく光のイメージも絵描いていたり(原文ママ)、折り紙を使い音を作っていました。その発想が素晴らしいと思いました。
	⑩自己の感性を高めることへの意欲	・私は、やはり固定された考え方をしてしまって、あまり表現をすることが上手くできませんが、(中略)聞こえる音だけではなく音の大きさなども違うので、もっといろんな音を聞こうと思いました。 ・「共感のまなざし」は、今から意識して持とうと思いました。子どものキラキラした気持ちに気づいて手をさしだせる保育者になりたいです。
	⑪幼児の指導法への応用	・音や場所の表現一つでも、様々な方法、描き方を出来るよう環境をつくろうと思った。 ・声かけを、ワンパターンではなく、その子の感性を知ることを最初にしてからやろうと思う。 ・外や他の教室へ周りながら(原文ママ)どんな音がするのかさがし、その音に似た音(物や楽器)を作ったりしてみんなで鳴らしてみたい。

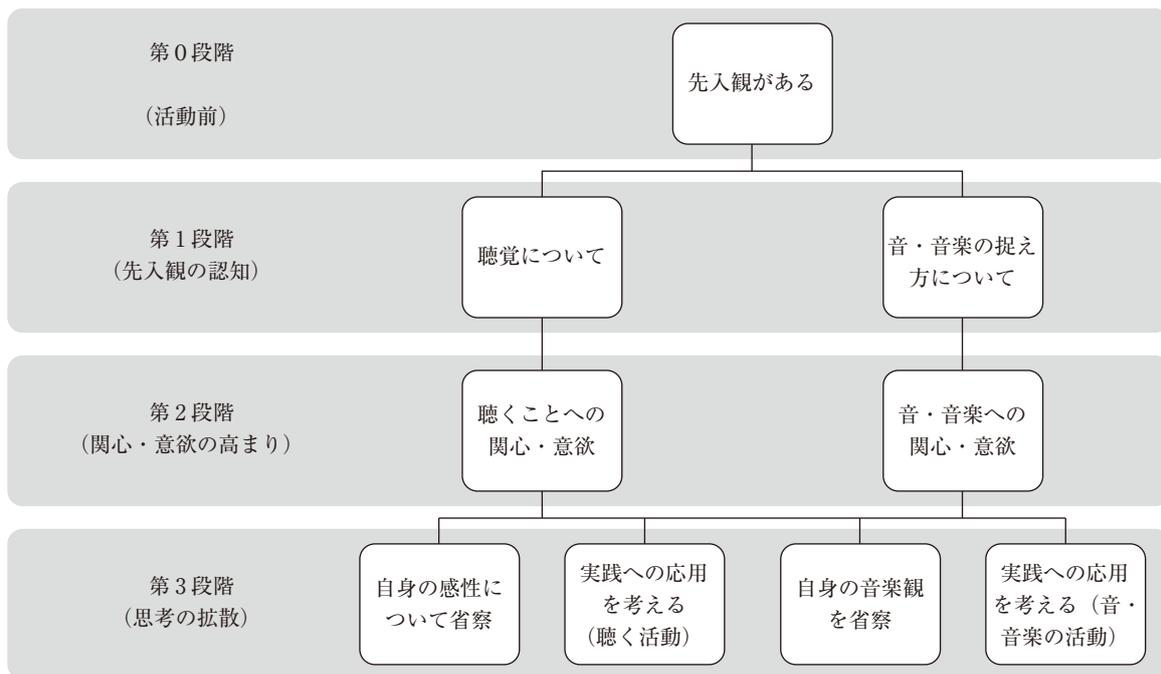


図7 思考の展開過程

活動において先入観を認知したことにより（第1段階）、感性や表現への関心・意欲が高まる（第2段階）。この関心には2種類あり、一つは音の捉え方についての関心、もう一つは聴覚についての関心である。この2種類の関心から、それぞれ①自身の聴覚や意識について省察する②幼児の指導法における聴く活動への応用を考える③音や音楽に対する自身の考え方について省察する④幼児の指導法における音や音楽に関する活動への応用を考える、というように拡散していく（第3段階）。

したがって、本研究における一連の演習は、対象者が自身の感性について省察する機会となり、なおかつ幼児の指導法について、その具体的な方法を学ぶ機会ともなり得る点で、総合的な学びを可能にすると考えられる。

また、本研究により、学生の記述の厚みは主活動であるサウンドマップづくりよりも、むしろ導入とまとめの活動のほうにあることが明らかとなった。導入でいかに驚きと発見を体験するかということが、続く主活動に対する意欲に大きく影響することが読みとれた。まとめの活動もまた、他者の多様な表現に触れるという点で、新鮮な驚きと発見であることから、対象者の関心・意欲は、未知のものに触れた時にこそ高まると考えられる。

こうしたことから、導入とまとめの活動をより丁寧に、時間をかけて取り組むことにより、学びがより深いものとなると考えられる。

5. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、保育内容「表現」について、対象者の保育者としての感性を高めると同時に、幼児の指導法についても総合的に学ぶことを目的として「サウンドマップづくり」を実践し、一連の自由記述から思考の展開過程について考察した。

その結果、対象者は自己の先入観を認知し、これまでに知らなかった「音」の捉え方に気づくことをきっかけとして自分を振り返り、自分を知る体験をした。こうした実践が、未知の事象への強い関心を引き起こし、アクティブな表現活動につながったと考えられる。導入の活動によりアクティブになった思考の方向性は、自分自身についてのみならず、幼児の指導法への応用について考える方向へも及んだことから、本研究における一連の実践は、「感性」「表現」「指導法」といったことについて対象者の拡散的な思考を促す効果があったと考えられる。対象者の記述は、主活動よりも導入とまとめのほうに厚みがあったことから、導入とまとめの活動は非常に重要であり、これが主活動への意欲や活動の成果

(作品)に大きな影響を与え、学びの深さを左右することが示された。したがって、導入において「音を絵画で表現する」すなわち「聴覚で感じ取ったことを視覚で表現する活動」について「よく理解できない」という反応があったときに、このことが十分に理解できる別の方法を取り入れたり、じっくりと時間をかけたりして丁寧に取り組むことを大切にしたい。

また、他教科との連携も課題である。保育の表現に関する科目は、言語表現・身体表現・造形表現・音楽表現の4科目が設定されており、学生はそれぞれの分野の理論や実践について個別に学習する。本稿で主題とした保育内容「表現」の授業では、各教科で個別に学んだことを統合し発展させたり、応用的に取り入れたりすることで、学生自身の創造性を高めたり、幼児の指導法についての実践的な学びを深めていきたい。しかし、本研究における実践の過程で、学生にはその視点が不十分であることが明らかになった。他教科との連携や、教科横断型の授業デザインについて、今後の課題として検討していく必要がある。

謝辞

本学学長の中澤潤教授には、本稿執筆にあたり貴重な助言をいただきました。また、調査対象とした学生は自由記述や作品画像の利用を快諾してくれました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- 厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館
- 古根川円・今村方子 (2012) 「保育内容 (表現) にみる「美しさ」とは何か—学生の授業実践記録から—」『子ども未来学研究』, (7), pp.49-56
- 細田淳子 (2006) 『わくわく音遊びでかんたん発表会—手拍子ゲームから器楽合奏まで』, 鈴木出版
- R. マリー シェーファー (著), 鳥越けい子, 庄野泰子, 若尾 裕, 小川博司, 田中直子 (翻訳) (1986) 『世界の調律—サウンドスケープとはなにか (テオリア叢書)』, 平凡社
- 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領解説 芸術 (音楽・美術・工芸・書道) 編・音楽編・美術編』, 教育出版

